

ヨーロッパ核医学会（EANM 2019）参加報告

若林 大志

2019年10月12日から16日にスペイン（バルセロナ）で開催されたヨーロッパ核医学会（EANM）に参加した。

EANMは、アメリカ合衆国で開催される米国核医学会（SNMMI）と並ぶ世界核医学の2大大会の一つであり、ヨーロッパ以外からの参加も年々増加している。治療に関する演題が多く、腫瘍、心臓、脳などさまざまなセッションが11会場で行われた。

核医学診療科からは、絹谷先生、中嶋先生、萱野先生、私の4名が参加した。中嶋先生は心臓、人工知能の分野で、萱野先生は腫瘍分野で発表されていた。私も腫瘍分野で発表し、小児神経芽腫の¹³¹I-MIBG地固め療法後に撮像される¹³¹I-MIBGシンチグラフィは診断用¹²³I-MIBGシンチグラフィよりも病変の検出率が高いことを報告した。核医学会のブースでは、2022年に京都で開催される世界核医学会（大会長：絹谷教授）の紹介活動も行ってきた。これは連日盛況で、たくさんの学会参加者が訪ねてこられた。このほか、私は前立腺癌に対する日本未導入の¹⁷⁷Lu-PSMA治療、神経内分泌腫瘍に対するPRRT治療、線量計算、Theranostics、 α 線治療などの腫瘍分野を中心に情報収集を行った。世界では¹⁷⁷Lu-PSMAやPRRT治療以外にもたくさんの治療法が開発されており、今後の有用な核医学治療法として期待される。また、 α 線と β 線を使い分け、いくつかの核医学治療を組み合わせる核医学個別化医療の実現に向けた課題と将来展望が示されていた。

今回の学会では、記録的被害をもたらした台風19号の影響で参加を断念、予定変更された方がおられた。私自身も飛行機の出発遅延により予定していた会合に参加できず残念であった。学会の会期中にはバルセロナ市内各地でカタルーニャ州独立をめぐるデモが行われ、空港が占拠された影響で帰国が延びてしまう方もおられた。スリなどの軽犯罪も多く、参加者でも被害にあわれている方がおられた。このような状況で、特に大きなトラブルに遭わず充実した日を過ごせたことは幸いであり、大変有意義な学会参加であった。

